

第53回日本統計学会大会

日本統計学会の第53回大会が、昭和60年7月23日～25日の3日間、岡山大学経済学部において開催された。林知己夫会長による会長講演（動物集団の標本調査）、韓国の朴聖炫氏による招待講演の他、4会場において約150の研究報告があり盛会であった。人口統計に関する部会は、本研究所阿藤 誠の司会のもと、以下の七つの研究報告が行われた。

1. 臼井竹次郎他3名「身分別妊娠月数別死産性比の統計」
2. 川崎 茂「同居児法による差別出産力の推計」
3. 津村善郎他1名「出生性比に関する一考察」
4. 大久保正一「自殺と中年死亡」
5. 丹後俊郎他1名「人口動態死亡統計の解析—Multiplicative model での分析について—」
6. 前田正久「Reed—Merrell 法の適用に関する考察」
7. 鈴木啓祐「地域別人口密度の混合対数正規分布の生成の可能性とその実証的考察」

(阿藤 誠記)

日本老年社会科学会第27回大会

日本老年社会科学会（会長：那須宗一淑徳大学長）の第27回大会は、昭和60年9月27日（金）～29日（日）の3日間にわたり、東京都千代田区平河町の全共連ビルにおいて開催された。今回の大会は、日本老年医学会および日本基礎老化学会と隔年で共催する日本老年学会の第14回大会としても同時開催され、盛大な大会となった。

第1日目の午後に開かれた老年社会科学会総会の後に、会長講演「高齢化社会のサイエンスとイマジネーション」があり、さらに、前田甲子郎氏（名古屋市厚生院）司会のもと、青木信雄（五木田病院）、小国英夫（健光園）、冷水豊（東京都老人総合研究所）諸氏の報告によるシンポジウム「これからの老人福祉施設体系—いわゆる中間施設論をめぐって—」が行われ、それらの報告をめぐって活発な討論がくりひろげられた。

今回は東京での開催ということもあって、本研究所からも多数の会員が参加したが、そのうち、岡崎陽一所長が「人口問題からみた老人問題」、清水浩昭科長が「三世代世帯の形成過程をめぐって—総務庁老人対策室調査結果報告—」、中野英子科長が「再び労働力人口の中高年化について—女子の労働力供給との関連で—」と題して、それぞれ一般報告の部会（第12分科会）で研究発表を行った。この分科会におけるその他の報告で人口に関連あるものとして、日本大学人口研究所黒田俊夫名誉所長の「日本人口高齢化の新次元」があった。

なお、同時開催の日本老年学会においても盛り沢山のプログラムが組まれ、吉川政己会長（東京警察病院）による講演「高齢化社会と老年学」をはじめとし、大羽滋氏（東京都立大学）の「寿命と遺伝」、橋本司郎氏（朝日新聞社）の「高齢者福祉の動向と問題点」など6題の特別講演、それから外国からの招待講演も行われている。（山口喜一記）

ハンガリー中央統計庁および国立人口研究所での会議

フィレンツェでの国際人口学会（本誌資料欄での状況報告を参照のこと）は1985年6月5日から12日まで行われたが、同月15日から21日まで7日間、ハンガリー中央統計庁の招きを受けて、本研究所人口政策部長河野 稔はブダペストに行き、ハンガリー中央統計庁人口社会統計局を訪れた。人口社会統計局では局長でかつ統計庁副長官のBarnabas Barta氏、人口統計部長のAndras Klinger博士、人口動態統計課長のPeter Jozan博士の歓迎を受け、同局を視察すると共に、ハンガリーと日本の人口情勢、とくに死亡率と平均余命の動向、その原因について意見の交換を行った。また、将来死亡研究の分野で本人口問題研究所とハンガリー中央統計庁とで共同研究をしたいという希望表明も行われた。